

翻訳という世界

〈8〉



船越 隆子

翻訳家

を付ける作業は、いつも悩ましい。

ます。

内容をよく表しだりと

当てはまるかつていい文

句、そして人目を引いて、

願わくば売れるそな題名

外語名そのまま片仮名

にするか、日本語に訳す

か、あるいはまったく違つ

か題にするか。

アム・レジエンド」という

映画を見た。治療薬を使つ

たウイルスが突然変異を起

こし人類は滅ぼ寸前になる

が、生き残った科学者が血

清を作り出し、最後はそれ

を守るために爆死。彼のお

かげで人類は救われたとい

うストーリー。

インターネットで調べて

「ミッション・インボッシ

ブル」に改題された。

書籍の話になるが、数年

まつたのだから「私」でな

く「彼」が伝説になった

認知症の母と娘の物語

であつて、つまり正しい題

（エレノア・クーニー著

名は「ヒー・イズ・レジエ

ン・オーブンナレッジ社）を出

版した際には、なぜその題

出くわした。

なるほど。でもそれなら

た。というのも、原題は

おそらく邦題はそのまま片

仮名ではならなかつただろ

う。「アイ・アム…」だか

らインパクトがあるが、

「ヒー・イズ…」ではちょ

つと弱い。きっとまたたく

たからだ。

この本は、米国の文庫作

家が、やはり著名な作家だ

った美しく聰明な母親が認

知症になつて壊れていく

いかと思う。

別の題名になつたのではな

い。

さまでつづつたドキュメン

タリーだった。原題は、直訳すれば「(認知症は)いつも死んでくるやつ」である意味だ。けれども日本では、本の題名には「死」という文字を避ける傾向にある。だから編集者も私も、原題に引きずられるよりも、この本の持つ雰囲気や、著者が描く魅力的だった母親のイメージが醸し出されるようなタイトルにしてみたいと思つた。

そこで出でたのが「夕光の中でダンス」だった。本の中では、母親がダンスを踊るわけでもないし、クラシックで夕日が出てくれた。映画は、人気俳優たちで演じられていない。でも、バーチャルでよく見ていた「宇宙大作戦」は、映画化されたり、「スター・トレック」になり、「スペイド大作戦」も「ミッション・インボッシブル」に改題された。

書籍の話になるが、数年前に「夕光の中でダンス」

と「夕光」でよく見ていた「宇宙大作戦」も出品されて話題になつた

ので、そんな彼女が喜んで

されなかつた。しかし昨

年、本とDVDが同時に発

表されているように思つ。売されることになり、「つまり、会いに来きます」とい

うタグがついた。しかし昨

年、本とDVDが同時に発

表されているように思つ。売ること



短い中にも思いが詰まる